

## 選評

坂本 篤史

### ヤコポ・ヴィンチャーリとサンタ・マリア・ノヴェツァ修道院

坂本篤史氏の論文は、いまだ基本的モノグラフの確立していない十七世紀フィレンツェの画家ヤコポ・ヴィンチャーリに焦点を絞り、この画家が同地におけるドミニコ会の拠点サンタ・マリア・ノヴェツァ修道院のために手がけた諸作品を同定することで、当修道院との関係を解明するものである。

なにより本論文の優れた点は、いまだ先行研究に乏しい画家の活動を、残存作品の精緻な様式分析と、年代記や注文記録など同時代史料の丹念な読解・照合を通して意欲的に再構成しようとする点にある。古文書館等に残る未刊行のラテン語史料を地道に解読する堅実な論証作業は、まさに国際水準のものといえる。

論文は、サンタ・マリア・ノヴェツァ修道院に関わるヴィンチャーリの三つの活動を軸に展開する。まず、ヴィンチャーリを当修道院に結びつけた要因として、この修道院を拠点としていた聖ベネディクトゥス信心会と、その精神的指導者であった修道院長ドメニコ・ゴーリの存在が注目される。ヴィンチャーリが、一六一四年以降に深い関わりをもった当信心会を介してゴーリの知遇を得て、ゴーリが修道院長時代に新たに導入した二つの試み、「死者の追悼式」と、「フランシスコ会との合同開催による聖ドミニクスの祝賀」に関わる作品制作を請け負うことで修道院との関係を結んだという初期の経緯が解明された。

次に、ヴィンチャーリが一六二〇年代に修道院鐘楼の「福者の部屋」に手がけた作品の同定と、装飾プログラムの解釈が展開される。ここでは、修道院の年代記の記録以外に残存しない図像も視野に入れつつ、詩篇と「ドミニクスの木」の図像伝統に基づき、当修道院が修道会創設者聖ドミニクスに連なる正統性を有することの視覚化が意図されていたことが的確に論証された。

最後に、ヴィンチャーリが晩年に関わった修道院図書館装飾の再構成と、この画家に帰属しうる三作品の同定が試みられた。論証は概ね妥当と考えられるが、なかには、後世に作品が切断された可能性など推測の域を出ない仮説もみられ、今後の実地調査による検証が望まれる。しかし、暫定的判断が残るとはいえ、先行研究のない作品を対象に、同時代史料に基づいて初めて包括的な再構成を試みた意欲的研究の価値を削ぐ要素とはいえない。

新知見に富む本研究の成果は、ヴィンチャーリのカatalog・レゾネを補完するにとどまらず、今後の十七世紀フィレンツェ美術をめぐる研究にも大いに資する重要な貢献として高く評価されるだろう。その意味でも、今後、基礎研究の域を超えたより掘り下げた研究へと発展することを期待したい。

以上の理由から、坂本篤史氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称える。